

ソ連より愛をこめて

——冷戦期日本における文化交流とソフトパワー——

秋草 俊一郎

1、はじめに

近年、ジョゼフ・ナイなどの国際政治学者によって、戦争などの武力によって他国を威圧し、屈服させようとする「ハードパワー」にたいする対概念として提唱された「ソフトパワー」は、文学研究においても注目をあつめている。特に二十世紀後半の冷戦期においてアメリカが、さまざまな手管でおこなった世界規模の「文化外交」は、かつての敵国であり、同盟国である日本もそのターゲットとしており、本邦のアメリカ文学研究、比較文学研究においても印象的な研究が発表されてきた。

たとえば、GHQや米国国務省主導で翻訳が進められた特定のアメリカ文学が担った役割とその受容¹、戦後、全国に設立された「CIE図書館」（のちにアメリカ文化センターと改称）や、翻訳家・日本文学者サイデンステッカーのはたした役割について²。最近では、作家や批評家を対象にして実施されたロックフェラー財団のフェローシップについて、アーカイヴ資料を用いた浩瀚な研究書も出版された³。CIE図書館や、アメリカの書籍の翻訳の援助システムについての関係者の具体的な証言もある⁴。

他方で、冷戦のもう一方の当事者だったソ連について、同種の研究はさほど目立っていない。ソ連の「文化外交」としては、映画やバレエ、サーカスなどが、より資金が投じられ、広く大衆の耳目を集めたと思われ、研究も先行しているようだ⁵。

「（日本における）ソ連文学による文化外交」というテーマに人の手が入ってこなかったとすれば、ひとつにはそれがあまりに自明で、生々しいものだったという点が理由としてあげられるだろう。史上初の社会主義国家ソヴィエト連邦では、文学者は「人間の魂の技師」とされ、文学はその技師によって明確な目的をもって製造されるイデオロギーの道具だった。当然ながら、その国外での受容も、イデオロギー色の強いものとならざるをえなかった。逆に言えば、映画やバレエ、サーカスといったエンターテインメント性の高いほかの視覚芸術とちがひ、イデオロギーの伝播の道具として、言語芸術がきわめて直接的な形をとらざるをえなかったため、むしろ「ソフトパワー」の道具としては不都合を抱えてこんでいたと言える。またその普及や伝播、翻訳にたずさわった文学者・翻訳家をはじめとする専門家や出版・編集人の多くが存命であり、関係者の存在が身近だったことも客観的な研究を難しくした一因だろう。ただし、二一世紀も二十年が経過しようとしている現在、当事者の記憶も急速に失われつつあることも事実である。

本稿では、主に五〇年代後半から七〇年代初頭にかけて、ソヴィエトの文学分野におけ

る対日文化外交と、その効果を概観することを目的とする。あくまでも情報の整理を目的とした予備的なものであり、今後国内外のアーカイヴなどの活用によってさらに研究が深められることを期待する。

2、文士たちのソヴィエト周遊

ソヴィエトの文学における文化外交をここでは三つに分類する。第一に、作家や批評家同士の人的交流について本節ではとりあげてみたい。なお、ソ連時代には一般人の渡航は制限され、基本的に招待状がなくては行き来ができなかった点を念頭におく必要がある。

終戦後結成された新日本文学会は、一九五六年に日ソ共同宣言が出される以前から、ソヴィエト作家同盟と交流のルートを持っていたようだ。一九五五年、第二回ソヴィエト作家大会が開催されると、新日本文学会の代表として、徳永直（会代表）、岩上順一が派遣されて出席した。同年、新日本文学会第七回大会にソヴィエト作家同盟から「友好的メッセージ」が送られている。

一九五七年八月二三日、ムフタル・アウエーゾフ、レオニード・クドレヴァティフが来日、新宿中村屋で新日本文学会と会合をもった（なお来日自体は第三回原水爆禁止世界大会のためとされている）。日本側の参加者は、中野重治、米川正夫、窪川鶴次郎、井上満、西野辰吉、西尾章二、壺井繁治、除村吉太郎、金達寿、黒田辰男、江川卓といった面々だった。この時の会合の様子は、『新日本文学』で紹介されているが、アウエーゾフは、日本側が用意した邦訳されているソヴィエト文学のリストを見て、こうコメントしている。

ロシアの作品はまことに広く訳されていますが、他の民族文学は少しも紹介されていないのはどうしたことなんです？ 今日、民族文学をのぞいてソヴェト文学を論ずることはできません。民族文学には多くのすぐれた作品があります。マヤコフスキイの作品におとらないものもあります。また、詩の翻訳が少ないのはどうしてなんです？⁶

アウエーゾフは、カザフ文学の長老的作家であって、長編『アバイ』はソ連国内では高く評価され、スターリン賞も受けていた（一九五九年にはレーニン賞も受賞）。しかし、日本ではその主要作品は今日にいたるまで翻訳されていない。オーチェルク作家で『アガニョーク』の副編集長でもあったクドレヴァティフについても同様に、日本ではまったくの無名だったから、おそらく日本文学者は（たとえロシア文学の専門家でも）大百科事典からの引用による紹介に頼るしかない状況だったろう。しかし、このような非ロシア語民族文学をもっと紹介しろという要望は、一作家ではなくソ連側の発したメッセージとしてとる必要がある。前述の第二回ソヴィエト作家会議で、アウエーゾフは「ソヴィエト連邦諸民族の文藝翻訳」について報告し、翻訳者もほかの芸術家と同じく「社会主義リアリズムの闘士」として、社会主義の普及のため活動すべしと述べているからだ⁷。

その後も新日本文学会はソヴィエト作家同盟と交流をつづけたようで、一九六五年はじ

めには、新日本文学会の招聘でヴィタリイ・オーゼロフ、コンスタンチン・チュグノフが訪日、日ソ作家たちの創作ゼミナールを秋にモスクワでおこなうことが取り決められたようだ。

ソ連作家同盟がコンタクトをこころみた日本の作家団体は、新日本文学会だけではなかった。『日本文藝家協会五十年史』によれば⁸、一九五七年、ソヴィエト作家同盟から打診があり、日本文藝家協会の代表三名を賓客としてソ連に招待したいという申し出が舞いこんだ。滞在費・帰途の旅費も負担するとのことだった。それを受けて、文藝家協会では第一回代表団が組織され、一九五八年四月、青野季吉会長、阿部知二、高見順、堺誠一郎書記局長が訪ソした。

その後、今度は日本文藝家協会がソヴィエト作家同盟の作家を招くことが慣例化した。一九六一年四月にオレーシ・ゴンチャル、イワノフが来日したのを皮切りに⁹、ほぼ毎年、二名から多いときで五名の作家が来日している。一九六六年五月には、前年にノーベル文学賞を受賞したミハイル・ショーロホフが来日し、雑誌・新聞などメディアで大きくとりあげられたが、ほとんどの場合、訪日するソ連作家は日本人にとっては聞き覚えのない人物だった。

話を日本文学研究者の訪ソに戻す。新日本文学会と異なり、日本文藝家協会の会員はかならずしも左翼的な作家とはかぎらなかった。興味深いのは、訪ソした作家に、ロックフェラー財団のフェローシップでアメリカに滞在した経験のある作家がいたことである。江藤淳、小島信夫、安岡章太郎がそうである。ロックフェラー財団の助成を受けて一九六〇年に南部のテネシー州ナッシュビルに半年間滞在した安岡だったが¹⁰、一九六三年六月から七月にかけて、小林秀雄、佐々木甚一（新日本文学会代表）とともに訪ソしている（なお、ロシア文学者の黒田辰男が通訳として同行したようだ）。このとき代表団は、モスクワ、レニングラードといったロシアの中核都市だけでなく、キエフのようなソヴィエト国内の共和国の首都をも訪問している。案内する側に連邦の多様性を見せたいという意図があったようだ。

アメリカ滞在の記録を『アメリカ感情旅行』としてまとめた安岡だったが、三週間のソ連旅行も、『ソビエト感情旅行』として刊行することになる。本書で安岡はソヴィエトを「不思議な国」というある種のステレオタイプでとらえる一方で、自分のアメリカでの体験と、ソヴィエトでの体験をくらべてもいる。そのうえで、ソヴィエトの食べ物や人に共感を覚えている箇所もあるのである¹¹。このような文脈では、安岡の娘、治子がのちにロシア文学者となったことが注目される。

日本側の資料を読むかぎり、ソヴィエト作家同盟は日本文藝家協会との関係をさらに深めることを望んでいたようで、いくつかアクションを起こしている。一九六八年一〇月には、四月に訪ソした草野心平、湯浅芳子をとおして文学書交換の希望をだし、結果として渉外委員会より外務省文化部をつうじて日本の文学書一一冊が送られることになった。

一九七二年には、来日中の作家同盟のニコライ・フェドレンコが、文藝家協会との交流

を強化したい提案をした（なお、フェドレンコは一九五八年から六二年まで駐日ソヴィエト特命全権大使もつとめていた）。一九七五年四月に理事と渉外委員長がフェドレンコと会談した結果、一九七六年一月になって回答があり、文学代表団のほかに専門家の交換派遣が実現した。しかし同年九月、専門家枠で派遣を準備していた木村浩が作家同盟より招待されず、文藝家協会は遺憾の意を表明している。木村が招待されなかったのはソルジェニーツィンの紹介者だったことに起因しており、文化交流と言えども政治的な制限のもとおこなわれていたことがわかる。

3、日本版『ソヴェート文学』の誕生

ソヴィエトがおこなった文学の分野における文化外交のひとつに、出版社に対する支援や、共同編集の手法がある。五十年代より、ソヴィエトの出版物を集中的に翻訳刊行する出版社がいくつかあらわれている。それらは、出版だけでなくソヴィエトとの貿易事業をおこなっていたり、あるいはソヴィエトからうけた貿易の割り当てをほかの総合商社に転換する「友好商社」の顔ももっていた¹²。文化事業として翻訳出版に助成金を出す国は日本をふくめて多いが、ソヴィエトの場合、より国策としての性格が強いだらう¹³。

そのような出版物のひとつとして、継続的に刊行されてソヴィエト文学の紹介を担ったメディアに雑誌『ソヴェート文学』がある¹⁴。編集主幹をつとめた黒田辰男自身がのちに語るところによれば、一九六三年、モスクワに滞在中に（これは前述の安岡章太郎らの通訳をしたときと同じと思われる）、外国語版の『ソヴィエト文学』の編集長をしていたヴァシーリー・アジャーエフから日本語版の刊行を勧められたという（黒田はアジャーエフの長編『モスクワを遠く離れて』の共訳者だった）。

外国語版『ソヴェート文学』は一九四六年から英・西・独の三か国語で、四九年からは仏語、ポーランド語が加わって発行されていた月刊誌であって、ソヴィエト文学の現状を海外の読者に翻訳で伝えることを目的とした文芸誌だった。一九四八年からはソヴィエト作家同盟の機関紙となり、ハンガリー語版とスロヴァキア語版も刊行されていたようだ。

帰国した黒田は、所属するソヴェート文学研究会のメンバーと協議ののち、提案を受諾した。こうして一九六五年一〇月に新しい翻訳紹介誌『ソヴェート文学』が刊行された。発売元は当時ソヴィエトの出版物を多く翻訳刊行していた理想社だった。その後、版元は飯塚書店、秋津書店、東宣出版、群像社と変遷する（どれもソ連との貿易をおこなっていたり、関係が深かった出版社である）¹⁵。記念すべき『ソヴェート文学』日本版第一号の巻頭の「発刊のことば」には以下のような文言がかかげられていた。

二十世紀は、社会主義の世紀をひらいた。ますます多くの民族、ますます多くの国家が、社会主義への道に移行し、社会主義建設を進めている。もとより、おのおのの民族・国家には、それぞれの社会的・歴史的諸条件があって、その社会主義への道は同一ではない。しかし今日、世界人類の進歩発展の道は、ただ一つ、社会主義への道があるのみである。

ソヴェートの文化・文学・芸術が、わが国に紹介・移植され、それが、わが国の進歩的な文学・芸術の発展に大きな寄興をあたえて来たことは、疑いのない事実である。われわれは、それがまた、今も変ることなく、わが国わが民族の進歩発展をひらき、その豊かな生活の創成を助けるものであることを確信する。¹⁶

このように、かなり明確な指針のもと刊行されていた『ソヴェート文学』だが、そのモスクワとの「共同編集」の実態はどのようなものだったのか。こちらについても黒田は以下のようにふりかえっている。

モスクワで編集翻訳されている外国語版「ソヴェート文学」は、文学・翻訳・美術を中心として、ロシア民族のみでなく、多民族ソヴェート文学・文化の新しい創造の紹介を目的とするものである。その内容は、新しく発表された散文・詩の諸作品、批評、文学の諸問題、美術論文、また新刊書籍や外国作家の新しい創作の紹介であるが、私たちの日本語版「ソヴェート文学」では、これに加えて日本の読者に興味のあるソ連の文学事情や、両国の文学、文化交流についても、それぞれの欄をもうけて取り扱われた。また、しばしばさまざまなテーマの編集によって日本語版は独自の内容を盛るものとなっている。¹⁷

実際モスクワで編集・刊行されていた『ソヴィエト文学』は、月刊であり、一号一号のボリュームも多く、隔月～季刊の『ソヴェート文学』では内容をフォローしきれないものだったろう。加えて日本語版『ソヴェート文学』には黒田の言うように、両国の文化交流についてのページがもうけられた。日本におけるソヴェート文学・文化の紹介だけでなく、ソヴィエトにおける日本文化についても紹介された。たとえば、東洋学者、科学アカデミー正会員ニコライ・コンラドのインタヴューや¹⁸、そのロシア文学者八杉貞利への追悼文なども掲載された¹⁹。また、巻末ではときおり日本の読者の声なども紹介された。

ただし、日本語版がモスクワから離れて、完全に自由にコンテンツを決められたわけではないようだ。このことに関しては、のちに『ソヴェート文学』の刊行を引き継いだ群像社の宮澤俊一がコメントしている。

ソ連の作家同盟には、群像社がどうしても発表したいと言った作家や論文には反対しないよう申し入れた。しかし、協定には「両者は内容について広く協議し、モスクワは群像社の希望を考慮する」と書かれるにとどまってしまった。

「モスクワの編集部自体が、一種の強権の支配下におかれてい」る状況にあっては²⁰、不本意な作品や論説の掲載を余儀なくされる場合もあったという。

共同編集はコンテンツへの介入だけでなく、人的交流のルートもひらいた。黒田によれば、「作家同盟との契約によれば、毎年双方で編集協議のためにその代表を交換招待する

ことになっていた」ため、『ソヴェート文学』の編集メンバーをともなって大学の夏季休暇によくモスクワに赴いたという。それだけでなく、「モスクワでの編集主任を当初から担当していたイリーナ・コジュエヴァニコワ女史は、ほとんど毎年日本を訪れた」²¹。

外国語版『ソヴィエト文学』は、前掲の黒田のコメント通り、社会主義国家、多民族国家ソヴィエトの文学を広く国外に紹介することを使命としていた。そのため、日本語版『ソヴェート文学』でも頻繁に非ロシア語の民族文学の作家・作品が紹介され、特集が組まれた²²。二六号（一九六九年）では「ウクライナ、白ロシア、モルダヴィヤ短編小説集」が、二九号（一九七〇年）では「現代ソヴェート詩人選」が組まれた。圧巻だったのは四四号（一九七四年）の「現代ソヴェート詩人一二〇選」で、百二十人の詩人の作品が一挙に翻訳掲載された。その中には、ロシア、ウクライナやグルジア、アルメニアのような共和国以外の、少数民族の詩も多く含まれていた。また、アイトマートフ（キルギス）、ルイトヘウ（チュクチ）、ガムザートフ（ダゲスタン）、カプチキーン（アルメニア）、サンギ（ニヴフ）、ゴンチャール（ウクライナ）、メジェライチス（リトアニア）のようなソヴィエト内の非ロシア語文学の作家の作品を掲載し、日本語の読者に紹介した。

一九八〇年に群像社が編集を引き継ぐまで、編集主幹を十五年にわたってつとめた黒田は、民族文学の重要性を理解していた。実際、後年黒田は「ソヴェート文学の最も主要な特性の一つは、その多民族性である。[中略]それは本誌の内容の全体に明瞭に反映している」と、はっきり述べている²³。その背景には、一九六〇年の春に、ソ連の各共和国を旅行した経験があったという。

一九六〇年の春、私はソ連の各共和国を旅行してまわった。この周遊の空路旅行は、ソ連の主要な諸民族の生活を知る上に大きなプラスを加えてくれ、それからえられた体験や知識は、多民族文学としての主要な性格をもつソヴェート文学の理解に役立ち、その後二十年にわたる雑誌「ソヴェート文学」の編集・翻訳の仕事にたいする意欲と情熱を支えてくれたのであった。²⁴

民族文学の出版は、ロシア古典文学とはことなり、採算面でもかなり難しいものだったと思われる。その中で『ソヴェート文学』が、貴重なショーケースとして一定の役割を果たした面は否定できない。

4、ソ連より愛をこめて

ソヴィエトは日本における出版を支援するだけでなく、本国においてもソヴィエト文学の日本語訳を刊行した（それ自体は前述の外国語版『ソヴィエト文学』の例もあり、日本に特化したことではない）。六十年代後半から七十年代においてその役割を担ったのは、当時日本文学のロシア語訳も多く刊行していたプログレス社だった。

プログレス社はその前身を外国語図書出版といい、やはり海外の図書の翻訳出版や、逆

に外国語図書の出版を手がける出版社だった。その刊行リストには、レーニンの著作集や、ソヴィエトの社会制度などについての書籍だけでなく、文芸書もあった。たとえば、一九六六年に出版した『海の物語』（岡田よし子訳）は、コンスタンチン・スタニューコビチ「マクシムカ」、アレクセイ・ノビコフ＝プリボイ「二等兵曹のはなし」など、海に関連した短編をあつめたアンソロジーだった。

この作品集で注目されるのは、訳者の岡田よし子である。これは戦前に活躍した女優の岡田嘉子（一九〇二—一九九二）で、一九三七年に交際していた演出家の杉本良吉とともに樺太からソ連に越境亡命したことで知られる。しかし当時はスターリンによる大テロルのさなかであり、杉本はスパイ容疑で処刑、岡田も収容所に送られた。その後、モスクワの内務監房で極秘任務についたとされる²⁵。岡田は四七年に釈放され、外国語図書出版で翻訳・校正の仕事についた²⁶。実際、五十年代にも岡田はソ連作家の絵本を翻訳出版している。

プロGRESS社は日本から翻訳者を有期で雇用し、モスクワで翻訳作業に当たらせることもした。その最初の翻訳者として採用されたのが、婦人之友社の元編集者の芹川嘉久子だった。芹川は一九六六年の秋より、二年間勤務した。このときの経験については回想記、『モスクワの顔』にくわしく書かれている²⁷。それによれば文芸翻訳だけでなく、雑誌の翻訳や、校正もしたようだ。ほかにも日本人翻訳者が勤務していたが、その中には岡田と同じような境遇のものや、シベリアに抑留されたあとそのままソ連に残ったものもいたようである。日本人による訳文にはすべて、ソ連の翻訳者による校閲がはいったという。

芹川の帰国後の一九六九年、プロGRESS出版社は芹川訳の作品集を三冊出版した。『革命の嵐について——ソビエト短編小説集』、『愛とたたかひの物語——ソ連諸民族作家の作品集』、『ソビエト戯曲集』である。この中で民族文学紹介の色合いが強いのは、『愛とたたかひの物語——ソ連諸民族作家の作品集』で、ヌルマラード・サリィハノフ（トルクメン）、モリス・シマシコ（カザフ）、レオニード・ペルウォマイスキイ（ウクライナ）、イオン・ドルツェ（モルダビア）、ユオザス・バルトウシス（リトアニア）、アブドゥラ・カハール（ウズベク）のような作家の作品が収録されていた。そのまえがきには以下のような文言がかかげられていた。

ソビエトには百以上の民族が住んでいる。十月革命ののち、それらの民族の多くの文化は真の改革と復興をなしとげた。[中略] いまや、かつて唾のように沈黙していた民族はしゃべりはじめた。²⁸

ソヴィエト文学の民族的多様性を示すうえで、^{アンソロジー}作品集という形式はうってつけだった。プロGRESS出版所は七〇年代以降も、類似の作品集を刊行しつづけることになる²⁹。そのうちの一冊、『現代ソビエト短編集——1960-1970年代』には、チムール・プラトフによる「この本を読まれる皆さんへ」という書きおろしのまえがきが付されていた。

〔前略〕そして今度は、またまた想像によってではあるが、門柱に日本という表札のかかった家に近づきつつある。

この短編集の作家たちは外国の読者たちに理解され受け入れられる権利を獲得する以前に、自分の祖国の多くの言葉で、読者に理解され、受け入れられているのである。彼らはロシア人、アルメニア人、モルダヴィア人、リトワニア人でありながら、わが国の多民族のあらゆる読者に身近かでわかるものを書こうと努めているからである。

個々の民族文学は自己の伝統をもっているが、その伝統は何か永遠に固まってしまったようなものでなく、ソ連の他の民族文学の伝統や相互影響によってつねに豊かになっているのだ。³⁰

ソ連国内の民族たちはおたがいにとって「身近」な創作をこころがけており、その豊かさがまた翻訳によって日本という新しい「家」に届けられる——まさに遠い国にあてた友好のメッセージである。

芹川と同じようにプロGRESS出版所に翻訳者として招聘された宮澤俊一はのちに群像社をおこし、『ソヴェート文学』の編集を引き継ぎ、イデオロギー色の濃くない新しいソヴィエト文学の紹介にも努めるようになった。

5、結論

一九五六年に、南カリフォルニア大学出版会から刊行された「極東およびロシア研究シリーズ」（このシリーズ自体が朝鮮戦争をうけての冷戦の産物であることは言うまでもない）の一冊、『ロシア分野における日本の教育研究』における調査では、一九五二年の外国文学の邦訳全体に対するロシア文学の割合は16.9パーセントに達しており、これはフランス、英米、ドイツについて第四位の数字だった。

しかし、ソヴィエト文学の邦訳は少なく、割合にしてロシア文学の八分の一程度でしかなかった。うち、革命前から人気だったゴーリキーの作品が半分以上を占めており、ソ連作家の不人気ぶりはきわだっていた³¹。本書はその理由も分析している。引用された翻訳家、昇曙夢のコメントによれば、そもそもソヴィエトと日本の政治・社会環境があまりにちがいき、日本人読者は自己同一化しづらいこと、ソヴィエト文学はロシア文学と違って人間味に乏しいことなどがあげられていた³²。

おそらく、ソヴィエト側でもソヴィエト文学が不人気だという認識はされていた。本稿で紹介したような文化外交の多くは、ロシア文学ではなく多民族的なソヴィエト文学の紹介を後押しする内容だったのもそのせいだろう。五十年代に日本で刊行されていた雑誌『ソヴェト映画』では、中央アジアを舞台にしたソヴィエト映画は、日本の観客にとって（ロシアの作品よりも）近しいものとして扱われていたというが³³、そのような目論見もあったのかもしれない。

しかし、ソヴィエトのこうしたソフトパワー戦略は必ずしも奏功しなかった。理由は

くつか考えられる。まず、肝心のコンテンツ自体が魅力的とは言えなかったこと。社会主義リアリズムをドグマとしてかかげ、その芸術ではなく政治への信奉者に守られた文学は、しばしばそれ以外の人を遠ざけることになった。

たとえば、ロシア文学者、翻訳家の江川卓のケースを見てみよう。江川は、一九六四年には新日本文学会代表として、日本文藝家協会の石川淳、安部公房とともにソ連に招かれている。しかし、一九六八年に刊行された著書『現代ソビエト文学の世界』で江川は巻頭に「ネクロログ」をかかげて、やはりロシア文学者であり、スパイの嫌疑をかけられたままシベリアでひっそりと獄死していた父外村史郎を追悼した。ソヴィエトに共感をしめしていた人間をそのように遇する体制に疑問を投げかけたのだ³⁴。さらに「あとがき——私とソビエト文学の出会い」では以下のように述べている。

はじめに偶像があった。「ソビエト文学」という偶像である。[中略] この宗教の多数の信徒たち、ましてや教団の幹部は、自分たちの偶像が他人の手によってほしいままにいじくりまわされることには、けっして寛大ではなかった。[中略] 異教徒には「反ソ反共」というレッテルが用意されていた。³⁵

のちに江川はスターリン批判後に復権された作家の評価をめぐる「いわゆるスターリン賞文学派の方々」とのあいだに「先鋭な衝突」があったことを認めている³⁶。実際、六〇年代後半より、江川は左翼的な人脈とも、ソヴィエト文学の翻訳とも距離を置いたようだ。江川のように評論家としてもすぐれ、一般の読者に訴求力をもった訳者を離反させてしまうようなソヴィエト文学のあり方は、ソフトパワー戦略として失敗だったと言える。雑誌『ソヴェート文学』にしてもそうで、のちに編集をひきついだ宮澤は「季刊『ソヴェート文学』に面白い作品が載るわけがないと思っていた」とまで言っている³⁷。

もうひとつ、付随して翻訳の問題もある。江川は戦後ソヴィエト文学の「翻訳者たちの主軸になった」「戦前のプロレタリア文学系の人」の経験不足を示唆している³⁸。たとえば『ソヴェート文学』の翻訳は経験のある翻訳者というよりは黒田の人脈でまかなわれていたようだが、かならずしも評判はかんばしくはなかった。江川は「翻訳にだいぶムラがあった」³⁹、宮澤は「下手な翻訳」と散々な評価である⁴⁰。また、非ロシア語民族文学の多くは原典からではなく、ロシア語からの重訳で翻訳されたが、それも単純に翻訳の精度だけでなく、翻訳者（ほとんどがロシア文学研究者、愛好家）のモチベーションにも影響しただろう。

ソヴィエトでも翻訳は重視されていた。たとえばソ連は万国著作権条約に加盟しておらず、翻訳自由の原則をうたっていた。これは多言語国家ソヴィエトの中で翻訳を活発にし、社会主義の理念を広くいきわたらせるためだった⁴¹。しかし国内の文化政策を、国外にもそのまま持ちこもうとすれば、一部のシンパには支持されても、そうでない人間には理解できないものになるのは当然のなりゆきとも言える。

ソヴィエト側としても民族文学中心のソフトパワー戦略の見直しをまったくはからなかったわけではなかった。六〇年代は、ストルガツキー兄弟を中心にソヴィエトSFが世界的に注目を浴びた時期でもある⁴²。七〇年頃より、SF小説も『ソヴェート文学』やプログレス出版所によって紹介されるようになった。

SFの起用には、ソヴィエトの科学技術の高さを誇示する狙いもあったと思われる。一九七三年より、プログレス出版所はSFアンソロジーの叢書である「現代ソビエトSFシリーズ」を発刊することになった。その序文でストルガツキー兄弟は、以下のように述べてソ連の科学技術の厳密性を誇っている。

ソ連のSFと他の国ぐにのSFとの違いは、厳密な科学性であると、よくいわれている。ソ連のSF作家が、現代科学のもっとも正確なデータに基づいて作品を書いていることは、たしかである。[中略]ソ連のSF特有の歴史的オプチミズムと徹底したヒューマンイズム、保守勢力に対する非妥協性が根本的な相違点であろう。⁴³

さらにSFの活用には、ソヴィエトの日本観も影響していたのではないか。というのも、一般的にソヴィエトでは日本の科学技術への評価は高かったからだ。日本学者のヴァシーリー・モロジャコフはソヴィエトにとって「日本は、「アクタガワの国」と「パナソニックの国」」だったと述べているほどだ⁴⁴。

また、明らかに日本向けと思われる作品もあった。シリーズ二冊目の『よくできた惑星』におさめられた短編、ボリス・グルフィンケリの「機械対人間」（原題 Эмоция жалости「哀れみの感情」とでも訳すべきか）は、日本を舞台にした作品で、ヤクザやコンピューター「電子大名」、原子力列車「神頼み号」、電子裁判官「天の岩戸」などなどが登場する内容だった。作者の「サイバネティックス関係の有名な専門家」グルフィンケリのコメントが作品のまえがきとして紹介されている。

『機械対人間』は、彼の最初のSF短編で1965年、ロシア語で発表。処女作の舞台になぜ日本を選んだかという質問に彼は「日本人の技術的才能に私がひじょうに魅力を感じているからでしょう」と答えている。⁴⁵

このように、ともに高度な科学技術をもった国として、ソヴィエトと日本の近さがアピールされた。実際にシリーズ四冊目の序文でも以下のように語られている。

本シリーズをお読みになる日本の読者は、ご自分と非常によく似た人びとが生活し、考え、夢想し、探求している仮想の世界を垣間見るに違いない。しかし、作中人物はみなさんとそんなに違わない。⁴⁶

ここにはS Fという特異な設定をもつ作品を紹介することで、かえって人間の普遍性に焦点をあて、それをアピールしようという戦略が垣間見える。また『ソヴェート文学』でも、「読者の期待に答え」るため⁴⁷、何度かS F特集を組んでいる（二二号 [一九六八年]、二七号 [一九六九年]、四五号 [一九七三年]）。

しかし、プロGRES出版所の出版物にせよ、『ソヴェート文学』にせよ、ごくかぎられた部数しか発行されず、大きな訴求力をもつようなものではなかった。一九六〇年代後半から七〇年代をとおして、もっとも影響力をもったソヴィエトの作家はアレクサンドル・ソルジェニーツィンであって、ソヴィエト政権に対する激烈な批判者だった。こういった点からも、文学のソフトパワー戦略利用の難しさがうかがえるだろう。

注

1. 鈴木紀子「冷戦期の「文学大使」たち——戦後日米のナショナル・アイデンティティ形成における米文学の機能と文化的受容」『人間生活文化研究』二三号、二〇一三年、二五八—二七六頁。
2. 越智博美「カワバタと「雪国」の発見——日米安保条約の傘の下で」遠藤不比人編著『日本表象の地政学』彩流社、二〇一四年、一三七—一六〇頁。越智博美「戦後少女の本棚」『モダニズムの南部的瞬間——アメリカ南部詩人と冷戦』研究社、二〇一二年、二一九—二三八頁。
3. 金志映『日本文学の〈戦後〉と変奏される〈アメリカ〉』ミネルヴァ書房、二〇一九年。
4. 宮田昇『図書館に通う——当世「公立無料貸本屋」事情』みすず書房、二〇一三年、九九—一〇三頁。
5. たとえば以下の書籍は終戦後から五〇年代の日本でソヴェト映画がはたした役割が論じられており、参考になる。フィオードロフ・アナスタシア『リアリズムの幻想——日ソ映画交流史<1925—1955>』森話社、二〇一八年、一六五—二〇二頁。
6. 「ソヴェト作家を囲んで」『新日本文学』一二巻一〇号、一九五七年、一六六—一六七頁。
7. ペ・ヴェ・アントコリスキー、エム・オ・アウエーゾフ、エム・エフ・ルイスリキー「ソヴェト連邦諸民族文学の芸術的翻訳」久野公訳『ソヴェト文学』一号、一九五五年、一六八頁。
8. 『日本文藝家協会五十年史』日本文藝家協会、一九七九年。
9. この「イワノフ」が誰なのか、『日本文藝家協会五十年史』には名前もないためわからない。劇作家・詩人のアレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・イワーノフ（一九〇九—一九七六）かもしれない。ロシア側のアーカイヴ調査が必要となるだろう。
10. 安岡章太郎『アメリカ感情旅行』岩波新書、一九六二年。
11. 安岡章太郎『ソビエト感情旅行』新潮社、一九六四年、九頁。
12. 島田進矢「ロシア文学と共に30年——群像社 島田進矢氏に聞く」
<https://www.nippon.com/ja/people/e00092/>（二〇一九年四月一八日閲覧）
13. 「友好商社」については名越健郎の著書にも書かれている。それによれば、ソ連より材木などの輸入の割り当てをもらったうえで、利益の一部を共産党や社会党に献金することもしていた模様である。以下の書籍に名前があがっているナウカ社もイスクラ産業も出版もおこなっている。名越健郎『クレムリン秘密文書は語る——闇の日ソ関係史』中公新書、一九九四年。
14. 雑誌『ソヴェート文学』にはいくつか種類があった。まず一九五五年に米川正夫、除村吉太郎、藏原惟人、黒田辰男、和久利智一、井上満ら「ソヴェート文学編集委員会」が中心になって刊行された『ソヴェート文学』（至誠堂）があった。これは第二回ソヴェート作家大会を特集したもので、「第一号」と銘打たれ「創刊のこぼ」が載っていたことから、継続刊行するつもりだったと思われる（しかし、第二号以降は刊行されなかったようだ）。その後、黒田ら早稲田大学関係者が中心となって結成された「ソヴェート文学研究会」が、季刊『ソヴェート文学』（理想社）を一九六二年に創刊した。これは会員が論文を発表する研究誌であって、ソヴェート文学というよりはロシア文学を主題にした論考が多いものだった。その後、『ソヴェート文学』と連携した『ソヴェート文学』が刊行される運びとなり、研究誌の『ソヴェート文学』は『ソヴェート文学研究』と名前を変え、一九六五年に六号まで刊行されたが、その後中絶した。
15. 黒田辰男「『ソヴェート文学』の二十年（その一）」『ソヴェート文学』九一号、一九八五年。
16. 「発刊のこぼ」『ソヴェート文学』一号、一九六五年、四頁。
17. 黒田「『ソヴェート文学』の二十年（その一）」一九八—一九九頁。
18. ニコライ・コンラード「時の速い流れ（東洋学者コンラードとのインタビュー）」丸山政男訳『ソヴェート文学』三一号、一九七〇年、六八—七七頁。
19. ニコライ・コンラード「八杉貞利教授追悼」『ソヴェート文学』八号、一九六六年、八三—八四頁。

20. 宮澤俊一『ロシアを友に——演劇・文学・人』群像社、二〇〇二年、三〇五頁。
21. 黒田「『ソヴェート文学』の二十年（その一）」一九九頁。
22. 一九五〇年に創刊された雑誌『ソヴェト映画』でも、民族性は重要視されていた。フィオードロワ『リアリズムの幻想』一八二—一八六頁。
23. 黒田辰男「私のソヴェート文学六十年」『ソヴェート文学』九四号、一九八六年、一九〇頁。
24. 黒田「『ソヴェート文学』の二十年（その一）」一九七頁。
25. 他の日本関係者と同じく諜報関連任務についていた可能性が高い。名越『クレムリン秘密文書は語る』六二—六六頁。
26. 岡田嘉子『ルパシカを着て生まれてきた私——女の自叙伝』婦人画報社、一九八六年、七九頁。岡田嘉子『悔いなき命を』日本図書センター、一九九九年、二〇三頁。
27. 芹川嘉久子『モスクワの顔』中公文庫、一九七九年。
28. 『愛とたたかいの物語——ソ連諸民族作家の作品集』芹川嘉久子訳、プログレス出版社、一九六九年、五一—六頁。
29. 秋山勝弘監修『現代ソビエト短編集——1970-1975年』プログレス出版社訳、プログレス出版社、一九七八年。チングス・アイトマートフ、エフゲーニイ・イロノソフ、ヴラジーミル・ランドリャコフ『現代ソビエト作家三人集』黒田辰男訳、プログレス出版社、一九八〇年など。
30. チムール・プラトフ「この本を読まれる皆さんへ」『現代ソビエト短編集——1960-1970年代』宮澤俊一訳、プログレス出版社、一九七四年、六一—七頁。
31. Peter Berton, Paul Langer, Rodger Swearingen, *Japanese Training and Research in the Russian Field*, Los Angeles: University of Southern California Press, 1956. p. 158.
32. Ibid., pp. 158-159.
33. フィオードロワ『リアリズムの幻想』一九〇頁。
34. 江川卓『現代ソビエト文学の世界』晶文社、一九六八年、一〇頁。
35. 同書、三五五頁。
36. 野崎韶夫・内村剛介・江川卓・井桁貞敏・橘徳・雨宮潔・高野明・芹川嘉久子『露西亜学事始』日本エディタースクール出版部、一九八二年、一七五頁。
37. 宮澤『ロシアを友に』三〇四頁。
38. 野崎ほか『露西亜学事始』一六六頁。
39. 同書、一六六頁。
40. 宮澤『ロシアを友に』三〇四頁。
41. 石川惣太郎「著作権法の変遷——ソビエトからロシアへ」『成城法学』四八号、一九九五年、二九五—二九七頁。
42. 宮風耕治『ロシア・ファンタスタチカ（SF）の旅』東洋書店、二〇〇六年、一三頁。
43. A・ストルガツキー、B・ストルガツキー「まえがき」A・ストルガツキー、B・ストルガツキー編『不可能の公式』えびはらたけし訳、プログレス出版社、一九七三年、七頁。
44. ワシーリー・モロジャコフ『ジャポニズムのロシア——知られざる日露文化関係史』村野克明訳、藤原書店、二〇一一年、三一頁。
45. 『よくできた惑星』プログレス出版社訳、プログレス出版社、一九七三年、四八頁。
46. ワレンチン・チェルノコフ「S F と S F 作家について」『宇宙の黒い鶴』秋山勝弘訳、プログレス出版社、一九七六年、一一頁。
47. 黒田辰男「編集後記」『ソヴェート文学』四五号、一九七三年、二九八頁。

From Soviet with Love:

Cultural diplomacy in 1960s Japan

Shun'ichiro AKIKUSA

How did Soviet literature factor into the USSR's Cold War diplomacy in Japan? The role of Soviet literature in the USSR's Cold War policies has remained unclear, while some impressive studies on American cultural diplomacy have appeared since in the 2000s. Such studies show how the United States had exerted soft power through personal exchange or the circulation of literary translation in Japan. However, there have been few studies on Soviet politics in literature, though scholars have established circus, film, and ballet as objects of Soviet cultural diplomacy. In this paper, I will discuss my preliminary research on the topic of Soviet cultural diplomacy in the Japanese literary field.

Soviet cultural diplomacy in literature had three basic segments. First, there were some routes of personal exchange among writers and critics. The Union of Soviet Writers has regularly dispatched some writers to have a relationship with Shin Nihon Bungaku Kai [New Japanese Literature Association] and Nihon Bungeika Kyōkai [Japan Writers' Association] and vice versa. Second, the USSR also provided some financial aid and co-editorship support to Japanese publications. In 1965, a journal "Sov'eto Bungaku [Soviet Literature]" was launched by Kurotda Tatsuo and Risōsha. The purpose of the journal was to propagate not only Russian literature but also multiethnic Soviet literature. Third, the USSR made some Japanese translations of Soviet literature. Soviet publishing companies like Publishing House of Foreign Books and Progress Publishing House even published a number of Japanese translations of Soviet literature for propaganda purposes. The cultural diplomacy would attempt to show the reality of Soviet life and make the Japanese understand the Society social system.